
俺と獣と腐った世界と。

通行人A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と獣と腐った世界と。

【Nコード】

N0027U

【作者名】

通行人 A

【あらすじ】

ある日江戸に現れた一人の男。

その男はある人物と瓜二つだった…！

お知らせ

お久し振りです。

久し振りにこの小説を読み返してみたのですが、あまりにも未熟さが目立つな、と思ったので一話からもう一度書き直す事にしました。

未熟さは変わっていませんが、また頑張って書いていきたいと思っています。

お気に入り登録してくださった皆様、通りすがりに読んでくださった皆様。

本当にすいません！

更新はそんなに早くないと思いますが、以前よりもっと楽しんで読んでいただけるよう、日々精進していこうと思います。

新しくなった「俺と獣と腐った世界と。」を楽しんでいただければ幸いです！

通行人 A

他人のご厚意はありがたく受け取ろう！これ常識！！（前書き）

楽しんでいただければ幸いです！（o^ ^o）

他人のご厚意はありがたく受け取ろう！これ常識！！

静まれ。

鎮まれ。

遠吠え

唸り声

喘ぎ声

聞こえるか？この声が。

聞こえないのか、この声が。

早く

早く

この鎖を解いておくれ…。

「…やっぱ江戸は活気があんなあ。」

ジャリ、ジャリ、と新しい地の地面を踏みしめる。

前日に降った雨でぬかるんでいる地面には沢山の足跡が残されていた。

その足跡の数はこの町の人通りの多さを物語っている。

つまり活気があるという解釈でいいのだろう。

俺が以前いた田舎とはえらい違いだ。

「さすが、日本の中心地なだけあるってか…。」

賑やかな町の向こうにそびえ立つ、この地にまるで不釣り合いな建^{タイ}物。人通りの中に《人》でない者が混じっている原因の一つ。

《天人》

…てか、人混みの中に緑の肌が見えるんだが…。

はつきり言うときモイ。

何であんなのとすれ違って平然とできるのかが理解できん。

「よっ！そのいかしたあんちゃん！！団子食ってかないかい？」

そんな事を考えながら、特に目的も無くぶらぶらと歩いていれば、
団子屋の主人に捕まった。

…めんどくさッ！

「…いや俺は」

「何だいあんちゃん冷たいねえ。若いうちからそんなんじゃ、いつか嫁さんに愛想尽かされて出て行かれちまうよ。」

余計なお世話だ。

何で会ったばかりの人間に将来の心配までされにやなんのだ。

「俺は別に」

「ケチケチすんなよあんちゃん。今ならサービスするよ。」

「じゃあ遠慮なく。」

即答した。

他人の悪意を受け取る趣味は無いが、好意はありがたく受け取っておくべきだ。

これ俺の教訓。

俺の変わり身の速さに驚いたのか、主人は暫くポケットとしていたが、我に帰ると苦笑いをして言った。

「…あんちゃん…。現金だねえ…。」

そんな事を言われても、サービスすると言ったのはそっちなのだから、俺は悪くないと思うのだが。

現金？そんな言葉は生憎俺の辞書には載ってないな。何それ美味しいの？

安いと言われて飛びつくのは人間の性だと、俺は言い切ろう。

その言葉を思わずポロツと口にしてしまった俺は、苦笑いを浮かべていた主人に大爆笑された。

…初対面で失礼すぎやしないか？店長。

「はいおまち。たっぷりサービスさせてもらったよ。」

主人が俺の席に、大量の団子と大量の餡子が乗った皿を置いた。

…これサービスってレベルじゃねーだろ。

皿の上には、団子と餡子が見事なコラボレーションで、これまた見事な山を築いている。
江戸城も真っ青だな。

というか、これだけの量をサービスとか、そんなに儲かってんのかこの店。

これ確実に赤字ルートだぞ。赤字ロード突っ走る羽目になるぞ。家計が火の車になるぞ。

もしこの店潰れても俺は責任取らないからな！！

…とか言つて、しっかり団子の山を消化していつてる俺。
中々美味い。

実は俺は結構な甘党だったりする。だが、この事実を人に知られる度に疑いの眼差しと爆笑をプレゼントされる訳だ。

…失礼な。

そんなに俺が甘党なのが可笑しいか。

確かに目付きが悪いし、甘味をつついてる姿は想像しにくい顔をしていると思うが。

…あれ？これって結局顔が原因なのか？

因みに、この団子の山、爆笑料も含まれているらしい。

実はあの後、主人は俺の発言で、十分程笑い続けていた。

十分笑った後、こんなに腹の底から笑ったのは久し振りだとか、腹筋が炎症起こしそうだから後で病院行ってくるだとか、褒められてんだか、貶されてるんだかよく分からん言葉を頂き、主人は厨房へ引っ込んで行った。

…で、戻ってきたら皿一杯の江戸城を持ってきた。

爆笑料金分だとかで。

…爆笑料って何だ。

「そついや、あんちゃん江戸（此处）の人間じゃないだろう。観光かい？」

黙々と団子を消化し続ける俺を暫く観察していたかと思うと、主人が突然そう切り出した。

…正直、その質問には困る。観光に近いものもあるが、特にこれといった目的も無く、ただぶらぶらしているだけだからな。

「…まあ観光みたいなもんだな。特に目的も無いし。」

「そうかい。江戸はどうだい？活気があって良い所だろう？」

「…まあ良い所だとは思うが、天人が目立つな、此処は。」

まあ、ぱつと見の此処の印象はこれだったからな。

「…そうだねえ。最初見た時はビビったものだが、人間って怖いもんだねえ。」

時が経てば、そこそこ慣れちゃった。」

「…」

「まあ、所詮時の流れだよあんちゃん。」

主人は少し寂しそうだった。

…まあこの主人の歳なら天人が来るまでの平和な江戸を知ってるだろうしな。

少々複雑な部分もあるのだろう。

俺は団子の最後の一本を食べ終わると、席を立った。

「ごちそうさん。美味かった。で、いくら？」

「…あんちゃん、行く宛はあるのかい？」

「ん？」

俺が勘定を済ませようとすると、主人は唐突にそう口を開いた。

行く宛と言っても…。

「…どうかの宿に泊まると思うが…。」

まあ、基本的に根なし草だからな。

しかし、主人は何故そんな事を言い出したのだろう。
俺は僅かに眉をひそめた。

「うちで働かんかい？住み込みで。」

「…はああ！？」

どういう流れでそういう事になるんだ。痴呆か？

「住居も提供するし、給料も出す。どうだい？悪くない条件だと思うんだがねえ。」

「いやいやいや、ちょっと待て。」

何故そうなった。

俺はらしくもなく、珍しく動揺した。

「何かおかしい事言ったかい？」

「しいて言うならさっきの発言全てがおかしいな。」

何故初対面で少し話しただけの俺にそこまでする。
確かに悪くない条件ではあるが。

「そうだねえ…。ようは俺はあんちゃんが気にいったのさ。」

「…は？」

気にいったって…。

俺は思わず呆氣にとられた。

「…あんたお人好しすぎだろう。いつか騙されんぞ。」

「おやおや言うねえ。ならこのお人好し爺のご厚意に甘えてみる気はないかい？」

主人は俺の言葉に気分を害したようでもなく、茶目っ気たっぷり
そう言い放った。

…お人好し爺に甘えるのも一興、てか？

誰でも気に入らない呼び名って一つはあるよね？（前書き）

二話目です。

誰でも気に入らない呼び名って一つはあるよね？

時に俺は思う。

朝は惰眠を貪るための時間であると。

朝は俺達人間の中では、「起きる時間帯」と認識されているが、正直それは間違っていると思うのだ。

朝「起きる」という方程式は言わば、個人的な意識に過ぎない。必ずしも朝に起きる必要は無いし、そう定められているわけでもない。

なら何故、人間は「朝」に起きようとするのか。

それはつまり、人間の本能にプログラムされているのだろう。だが、たとえプログラムされているように判断するのはまた別のもの。

当然そのプログラムに逆らい、朝に起きない者も多い。

…今更だが今でこそ朝に起きる行為が根付いているが、もしかしたら昔は夜に起きる時代もあったかもしれない。

古き良きものが段々と失われていく今、昔の風習を忘れない事も大切だと俺は思う。

という事で俺は古き伝統を守り、本能という名のプログラムに逆らおうと思います。

「じゃあちよつくら寝て…」

「んなわけあるかああ！！」

…チツ。

思い立つたら有言実行、俺の素早い隠密行動は爺もとい主人に阻止された。

「何だよご主人。俺はたった今から自由の翼で布団へ羽ばたこうとしているんだが。生憎俺にはそんな趣味は無いんで、襟元を掴んでるその腕を離してくれると有難いな。」

「俺にもそんな趣味は無いわああ！！！！」

「じゃあ何なんだよ何でこんな朝っぱらから活動しなきゃなんないの人間の活動開始時間は十時ぐらいからだろうが。」

「何ヘンテコな理論立てて自分を正当化しようとしてんの！？余所は余所、うちはうち！！うちは早起きの！！」

「ご主人、最初のお人好しの悪徳商人キャラが崩れてるぞ。」

「誰のせいだああ！！！！」

おい。

悪徳商人ってところは否定しないのか。



そんなこんなで、昨日団子屋の主人に宗教勧誘の如く、働かないかと誘われ、何となく承諾した俺だったが、今現在進行形で早朝からさっそく駆け出されている。

…ちなみに朝五時に叩き起こされた。
定番の布団ひっぺがしで。

あんたはおかんか。

「たかが団子屋、されど団子屋！商売やってんだから朝早いのは当たり前だよ。」

「…ふあい。」

欠伸混じりの返事を返す。

…ようするに、開店準備中ってわけだ。現在進行形で。

「まあこれからバリバリ働いてもらうよ俊坊。」

「こきつかいまくる気満々じゃねーか。
って…俊坊はやめてくれって言うてんだろ。」

そう、昨日当然ながら主人に名前を聞かれ、答えたところ、何を血迷ったのか俺に「俊坊」等という呼び名を付けてくださったのだ。

俊坊って…。

俺「坊」で呼ばれる様な歳じゃないんだけど。

この歳で俊坊ってかなり恥ずかしいんだが。

と、散々反論してみたものの、主人は全く聞く耳を持って無い。どうやら何を言っても俺の呼び名は俊坊で通すつもりらしい。

…もう俊坊でいいわ。

俺はいちいち反論するのが面倒臭くなり、自分の中で自己完結させた。

店の戸を開け、暖簾をかける。

…じゃあいつちよ、仕事しますか。

充分細いのに「最近太った」って言う人って何かイラッとする。(前書き)

一部修正しました。突然ごめんなさい！

充分細いのに「最近太った」って言う人って何かイラッとする。

「俊坊ー！これ3番テーブルに持ってってくれー。」

「へーい。3番ねー。」

「お兄さん注文お願いー！！」

「はいー！ご注文は…」

…猫の手も借りたってこういう時の事を言うんだな。

店を開店させて三十分足らず、店内はかなりの大人数で賑わっていた。

俺は今、客の声とテーブルの間で忙しく足を動かしている。

苺パフェ、餡蜜、団子、大福、チョコレートソースがけ、間違いの無いように俺にしては珍しく慎重に注文をとっていた。

「爺いー。チョコレートソース井追加ー！」

「あーはいはい!!」

俺がさっきとった注文を聞くと、主人は慌ただしく厨房を行ったり来たりしている。

その動きは歳を感じさせない程若々しい。

…結構歳いつてるはずなんだが…。

「はいよ、これ五番テーブルに持ってつてくんな。」

目の前にドンと豪快に置かれたやや個性的な注文品を見つめながら、俺はらしくもなく、思わず口を開いていた。

「爺いあんた、こんなに忙しいのに、今まで一人で店やってたのか？」

主人は俺の問いに、まるで珍獣でも見かけた様に目を丸くすると、皺の寄った目を細めた。

「…そうだねえ…。婆さんが死んじまってからは、ずっと一人でやってたねえ…。」

主人は、今の店の状態を忘れたかの様に、静かに言った。

「爺い…。」

「…まあ俺もまだまだくたばる気は無いんでねえ。この店を辞めるつもりは無いさ。」

爺い…あんた…

「その面と性格で嫁貰えたんだな。」

「どういう意味だゴラアアア！！！！」

そのままの意味だ。

「俊坊、お前さんこそ、その曲がりくねった性格を直さんと婿の貰い手がないぞ！！」

「大丈夫だ俺若いから。あんたよりは高確率で貰い手あるから。」

「ちょっと良い顔してるからって調子乗ってんじゃねえぞ俊坊！！」

あまりの言われように素で答えたら頭をしばかれた。

だから何で将来の事まで心配されなくちゃならんのだ。

俺は殴られて少し痛む頭を押さえながら、仕事を再開した。
相変わらず、店内には客がびっしりという。

この朝っぱらから甘味を食いにくるとは…江戸の人間は暇人なのか？それともあれか？この甘味達に何か仕込んでるのか？

あの狸爺いならやりかねないとメニューをガン見していると、怒声
と拳骨が飛んできた。

「いてっ…！！」

「さつさとお客に届けてきな。」

暴力反対。

…さつきから俺、殴られてばっかだな。

グギュルルルル…

「…ん…？」

…何か店の外からでかい音がした様な…。

「我慢アル…。この音は気のせいネ！け、決して食べたいとかそんなんじゃないネ！…！」

次いで高い、少女のものであろう声も聞こえる。

気のせいじゃなさそうだな…。

俺は、客に注文品を届けると、好奇心に負けて店の外に顔を出してみた。

「…あ？」

店の外にいたのは13・14歳程の少女だった。

異常な程に白い透ける様な肌、オレンジ色の髪、海を思わせる深い青色の瞳、そして晴れだというのに傘をさしている。

きわめつけはチャイナ服。

何か何処かでこの特徴聞いた事あるような気がするが…。まあ、地球人でないのは確かだな。

「…何してんだ？そんなところで。」

「！？」

相変わらず俺に気づく事なく、店の前で何事かブツブツ呟いているので声をかけてみた所、声をかけられるのは予想外だったらしく、かなり驚いた様子で振り向かれた。

「な、何もしてないアル！ただメニューを見てただけネ！」

「…そうか。」

んな必死に弁解しなくても。

「だ、大体お前！何も言わずにレディーの後ろに立つのは失礼アルヨ！…！」

「そりゃ悪かったなお嬢さん。ずっと店の前にいたからどうしたのかと思つてね。」

何だかこの子面白いな。聞いてもないのに本当に必死だ。

「ずっとじゃないアル！ちょっと見てただ…『ギョルルル…』」

「「……………」」

俺と少女の間に気まずい沈黙が走った。

…モギユモギユゴクンパクパクゴキュ

「……………」

沈黙。

俺と主人は目の前の光景に沈黙していた。現在進行形で。

目の前では先程の少女が凄い勢いで甘味を平らげている。
それはもう、表現できないような。

たまたま出会った少女が規格外の大食いだったなんて、誰が想像できようか。

見た目はかなりの美少女だと思うのだが、中身と外見は一致しないものらしい。要するに外見で人を判断してはいけないという事だろう。勉強になったなうん。

「うちそうさまアル!!」

「…お粗末様。」

甘味の器を見事に空にすると、少女は輝かしい笑顔を俺に放っていた。

「美味しかったアル!!」

「…そりやどうも。だが作ったのはそこにいる爺だから礼ならあっちに言ってくれ。」

爺も少女の食べっぷりには引いていたが、美味しかったと言われている満更でもないらしい。やけにニコニコしていた。

「それにしてもよく食べたな。最近食ってなかったのか?」

あまりにも腹の音が五月蠅いので、同情心から爺に頼んでおごったのだが。

「最近はずっとパンのミニだったアル。」

「……………」

「…何でパンのミニ?」

どという食生活だよ。そりや腹空くだろ。

「最近依頼が来なくてただでさえお金無いのに、銀ちゃんがパチンコに使っちゃったアル。」

「つたくあのマダオが、と少女は毒づく。

「本性出てるぞお嬢さん。つまり全ての元凶はその銀ちゃんとやらなわけね。」

「てかマダオって何だ。」

「マダオってのはまるでダメなおっさんの略アル。」

「最悪な略だな。俺は死んでも呼ばれたくない。」

「依頼っていうと嬢ちゃん、万事屋のこの子かい？」

すると、今まで会話に参加してなかった爺が突然割り込んできた。

「万事屋？」

「何だそれは。眉を寄せた俺の問いに答える様に爺が話しだした。」

「ここらじゃ結構有名でねえ。まあ何でも屋みたいなもんさ。…オ―ナーはちよつとあれだ、マダオだけどね。」

「…爺ちゃん銀ちゃんの事知ってるアルカ？」

少女は、まるで知り合いであるかのような主人の物言いに首を傾げた。

「ああ知ってるもさ。バツチリとツケがまだ残ってるからねえ。」

「金欠の上にツケまであんのか銀ちゃんとやら…。」

「チッ、マジでどうしようもないマダオネ。爺ちゃん、帰ったら私がこつてり絞つといてやるネ！」

「おや、頼もしいねえ。任せたよ嬢ちゃん。」

「まかせてヨ爺ちゃん！このかぶき町の女王に不可能は無いアル！」

爺と少女はいつの間にか銀ちゃんとやらをどうシメるかで盛り上がっている。

まあ何かあれだ。ドンマイ、名しか知らぬマダオ殿。

「兄ちゃんと爺ちゃん、おごつてくれてありがとアル！私そろそろ帰るネ！」

少女は爺と話し終わると、さっきまでの様子が嘘の様に、元気一杯に椅子から立ち上がった。

まああれだけ食べりや、元気にもなるだろう。

「ああまたな。…えーと」

「神楽ネ！私神楽っていうアル！！」

俺が何て呼べばいいか分からず口ごもっていると、少女はそれを察したのか自分の名を教えてくれた。

「…神楽か。良い名前だな。」

「私も気に入ってるアル！兄ちゃんは何て名前アルか？」

「…俊助だ。高橋俊助。」

少女、もとい神楽は俺の名前を聞いて満足したのか、見えなくなるまで手を振って帰っていった。

「俊助兄ちゃん、私また遊びに来るネ！」

神楽が、家に帰った後本当に銀ちゃんとやらをシメるのか見たい気が無かったことも無いが、俺は仕事に戻ろうと、神楽を見送った後、店に向かって歩を進めるのだった。

王道展開、非王道展開、貴方はどちらがお好み？（前書き）

俊助君と主人の雑談が殆どなので、話はあまり進んでないです…。

王道展開、非王道展開、貴方はどちらがお好み？

「強盗お？」

何だかんだで働き始めて二日目。

何だか知らんが、変な噂を耳にした。

「そう強盗。」

爺はカウンターに寄りかかり、何時もの笑顔を消して神妙な顔つきで俺にその言葉を告げた。

「…強盗がどうしたんだ？このご時世そんなに珍しくないと思うぜ？」

天人がはこびっている今、政治やら経済やらは天人が牛耳っていると言っても過言では無い。

”侍”が多く存在していた昔ならともかく、天人中心の政策なら当然失業者やらが増加する訳で…。

「俊坊の言う通り、別にそんなに珍しくないんだけどね…。」

「というか、強盗が狙うのは銀行やら大企業やら、まあ金がたんまりあるところを狙うだろう。」

「こう言ってしまうって是不謹慎かもしれないが、爺には少しも関係がないのでそんな警戒する必要はあまり無いと思うのだが。」

「せいぜい人質に取られたりして、巻き込まれないように気をつける事ぐらいしか一般人には対策方法がない。」

「だというのに何故そんな顔をしているんだか。」

「ところがどっこい、その強盗さん、銀行とかは狙わないんだよ。」

「…ん？ 狙わない？」

「…はあ？ 銀行狙わないなら何処狙うんだよ。」

「銀行強盗って強盗にとつたら、ロマンみたいなものかと思ってたぞ。」

「王道だしな。」

「銀行を狙わず、茶屋や老舗やら、儲かってそうな比較的小さな店を狙うのさ。」

「…それはまあ随分と変わってるな。」

王道嫌いかその強盗。

「じゃあ、心配ないよな。この店は標的にならんだろ。」

「俊坊！。話聞いてたかー？」儲かってる”店って言ったよね？」

「言ったな。だから狙われる可能性は低いって…」

「てめえの目は節穴かあああ！！昨日お前さんは何を見た！？客満員だっただろうがああ！！！」

ああ見たよ見たともさ。

「それは、まああれだ。店が狭いから客がいっぱい入っているように見えるって…」

「勘違いってか！？脳の認識間違いつてか！？そう言いたいのか！！」

誰もそんな事言っていないっての。
被害妄想はよしてくれ。

お人好しの上に被害妄想が激しいなんて救いようが無い。いや本当に。

「心配するなよ爺。んな都合よくピンポイントでこの店が狙われたりしないよ。」

…という爺との会話が あったのが丁度今朝頃。

「金を出せえええ!! 客がどうなってもいいのかあああ!!」

…どうしてこうなった!!

どんなに凄い物でも人によっては宝の持ち腐れ（前書き）

俊助君が頑張ります。

どんなに凄い物でも人によっては宝の持ち腐れ

「金を出せえええ！！客がどうなってもいいのかああああ！！！」

さて、今現在の状況の確認と解説をしておこう。

俺の目の前には拳銃を持った男が二人。当然の事ながら覆面をつけているので顔は分からない。

でもまあ目と鼻と口から判断すると、顔は不細工っぽい。

俗にいうキモメンというヤツかご愁傷様です。

世間様と女性はそういうのには風当たりが強いからな。強く生きる。

…おつと話がそれたな元に戻そう。

ザッと見たところ銃の種類はスミッツ & amp・ウエッソンの第三型ってところだろう。

たしかあそこの銃は殺傷力が強い事でそこそ有名だったはずだ。天人にも評価される程の。

ぶっ放されたらたまったものじゃない。

こんな狭い店内で撃てば客どころか店中に尋常ではない被害が出るだろう。

それを理解した上で男達は、”客がどうなってもいいのか”と脅迫文句を使っているのだとおおよその見当はつく。

今店内にいる客は十五人程。

十人ぐらいならなんとか隙をついて避難させられたかもしれないが、如何せん数が多い。

しかも、客の殆どは男達の持っている銃に怖じ気づいたのか、身動きが取れない状態だ。

逃げろと言われて早々に逃げる事は不可能だろう。

そして、カウンターで「おいおいお前強盗来ないって言ったじゃん来ちゃったじゃん言ったそばから登場してるじゃん!!」
という顔をして固まっている店長兼爺。

此方も無理だな固まったままだ。

そして此方を見るな爺。

確かに俺はピンポイントで狙われたりしないとは言ったが、預言者でも何でも無いんだ。確証など何処にも無い。

強盗共の気まぐれまでは予想できる訳ないだろうが!!

「おいそこのガキイ!!」

何ボケツと突っ立ってんだ!レジの金全部袋に詰めて持ってこい!
!!」

なんて考えてたら強盗様から直々にご指名が来た。

え?ガキって俺の事だよな?

何で其処に”店長です!”って感じの爺がいるのに俺指名なんだよ。普通店長に要求するもんじゃないのそーいうの。

駄目だコイツら強盗としてはド三流だな。

強盗としての心得っていつの？そっいつのが理解出来てないわ。

だからお前らは何時まで経ってもモブキャラ止まりのキモメンなんだよ。

「おいイイイ！聞こえてんぞそこオオオ！！」

「誰がキモメンだアアア！！コイツはそうかもしれんが俺は違う！！」

やべ、口に出てた。

「分かったよ分かったよ！！店長に言えば良いんだな！？」

「俺達是一流だからね！！一流は三流とはレベルが違うからね！レベル1で魔王倒すのとレベル100で倒すのくらい違うからね！？」

お前らそんなに三流は嫌か。

何かやたらと一流を強調してくる強盗共。トラウマでもあるのだろうか。

そして此方を見るな爺。恨みのこもった視線を向けんな禿げるから。安心しろちゃんと骨は拾ってやるよ。

「「おらアジジイ！！早く金出せコラア！！！！」」

さっきのやり取りのせいでグダグダな空気の中、強盗達は標的を爺に変え、銃を向ける。

爺は銃を向けながら、ゆっくりとレジの方へと向かっていく。爺の頑固な性格では、絶対金を渡さないと思っていたが、相手は一応銃を持っている。

そこは大人しく従うつもりらしい。

強盗達の目は爺と爺の手元に釘付けになっている。つまり俺は今ノーマークだ。

先程と比べてかなり隙がある。何とかできるかもしれない。

俺はレジで金を弄っている爺に目配せをすると（爺はすぐに視線に気づき、俺の意図を察したのか目だけで了承の意を示した。）直ぐ様行動を起こした。

善は急げっていうだろ。いや、ちょっと違うか？

「がッ！！」

俺は素早く強盗達の背後に忍び寄り、武器であり、最も脅威になりうる銃を強盗の手目掛けて蹴り上げる。

予想外だったのか、銃を失って動揺した男の腹に、すかさず拳を叩きこんで気絶させた。

「ッの…クソガキィ！」

仲間を倒されて頭に血が昇ったのか、もう一人が俺に銃を向けてくる。

その光景を見た客の一部から甲高い悲鳴が上がるが、俺の知った事ではない。

確かに飛び道具である銃は、刀などよりも厄介だが、使い手が素人もしくは熟練者でない者の撃ち出す弾丸は、鍛えていれば避けられない事もないのだ。

見たところ強盗慣れしている所から、今朝爺が言っていた、最近巷を騒がせている奴等で間違い無いだろうが、銃はあくまで威嚇用なのだろう。

その証拠に銃には使い込んだ跡も傷も無く、新品同様の綺麗な物だ。

これらの事から、銃の扱いに関しては素人である事が推測できる。

それに、先程倒した男の動きから見て、体術に関しても大したことはない。

「クソがアアア！」

男が引金に指をかける。

俺は男が撃つ前に倒そうと、勢いよく床を蹴った――

――ドカアアアアン!!!!!!!!!!――

「…は…？」

俺は思わず足を止め、目の前に強盗がいるのを忘れて、呆然とする。店の壁が、いや、正確には壁だった物が、爆音がした直後、一瞬で跡形も無く消え去っていた。大きな爆音と共に放たれた熱風が店の中に漂い、俺の頬を撫でていく。

「…な、何だ！？」

目の前の男も、かなり動揺している。一瞬こいつの仲間か何かの仕業かと疑ったが、反応からして、どうやら違うらしい。

パラパラ…

「やーっと見つけたぜイ観念してお縄につきなせエ。」

瓦礫を踏み潰し、大穴の空いた壁から店内に入ってきたのは、俺と
同じ年くらいの男だった。

少し幼さの残る顔、亜麻色の髪、俺と同じくらいの背丈、腰に刀。歳の割には、似つかわしくないきつちりとした黒い服を着ている。隊服か何かだろうか。

そして、一際目を引く肩に担いでいるモノ。

怪しく黒光りする、筒状の物体。

「…バズーカ…。」

…いやいやいや。何でバズーカ？

まさか壁ぶっ飛ばしたのはソレか。バズーカでぶっ飛ばしたのか。どんな強行手段だよ！

「チッ…真選組か…！」

その男の姿を見た途端、俺の後ろで苦々しく顔を歪める強盗。

…真選組？

「もう逃げられねーぜい。観念しなせエ。」

「ッ…ざけんなよ幕府の狗如きが…！」

「うおっ！」

強盗はかなり往生際が悪いのか、それともただの馬鹿なのか、近くにいた俺の首根っこを掴むと、首に腕を回し頭に銃を突きつけた。

「動くんじゃねえぞ！！こいつの頭吹っ飛ばされたく無かったらなあ！！！！」

…どうやら後者のようだ。俺は見事に人質にされたいらしい。

「ッ…！おい、今すぐそいつをはなしなせエ。」

バズーカ使う横暴な奴でも人質ごと殺つたりは流石にしないのか、人質（俺）の解放を求める。

俺の顔を見た途端、一瞬目を見開いたかと思うと、眼光を鋭くさせたが一体何だったのか。

「はッ！放して欲しかったらまず腰の刀を捨ててもらおうか！！」

人質をとった事で、優勢だと判断したのか、強盗の顔に余裕の笑みが微かに浮かぶ。

…だが、勿論俺はこのまま大人しくコイツの人質でいてやるつもりなど更々無い。

「次は一千万円用意しろや！！十分以内に…ぐアッ！」

緊張が緩み、隙が出来た強盗の顔に肘を喰らわせる。呆気なく床に倒れた強盗を、すかさず押さえこみ、抵抗出来ないように関節を外した。

「てめッ…！」

パチパチパチ…

「いやアゝ見事でさア。やりますねィ。」

その光景を見ていた青年は、動揺する事なく、手を叩きながら此方に近づいて来る。

「流石現役過激派攘夷浪士。強盗程度なんぞお手のものつか…？」

「…は…？」

こいつ何言って…

ダァン！！！！！！

「いつ…！」

いつの間に俺の後ろに来ていたのか、青年は俺の腕を掴み捻り上げると、床に押し付ける。

「何すつ…！」

直ぐ様抗議しようと思は首を捻り、後ろを向こうとするが、それはかなわなかった。

「何の目的で此処（江戸）に来たのかは知らねーが…大人しくしなせエ。」

タマ（命）取られなくなったらな。」

青年は鋭い目で、殺気を出しながら、俺の首にヒヤリと冷たい鉄の

塊―刀を押し付けている。

どういう事だ。俺はてめえに刀なんて突き付けられる覚えはねえぞ！

俺は腕と首の痛みに顔を歪めながら、青年を睨む。

「もつてめエは二度と陽の光は拝めやせんぜイ？…高杉。」

…どつやら、もう一波乱ありそうだ。

どんなに凄い物でも人によっては宝の持ち腐れ（後書き）

…あれ？口調が何か違うような…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0027u/>

俺と獣と腐った世界と。

2011年11月26日19時45分発行